

平安漢詩文に詠まれた「涙河」

梁青（厦門大学 / 博報財団招聘研究員）

【キーワード】平安時代、漢詩文、和歌、涙河

0. はじめに

「涙河」は涙が流れるのを川に見立てた表現である。『世説新語』の「顧長康拜桓宣武墓、…声如震雷破山、涙如傾河注海」は、涙を川に喩える最初の中国詩における用例とされている。「涙如傾河注海（涙は河を傾けて海に注げるが如し）」は、庇護者を失った悲しみを表現するために用いられている。その後、詩語「涙河」は「孝闕涙河、功慚汗海」（『芸文類聚』卷四八・職官部四・北魏・温子昇・為臨淮王謝封開府尚書令表）、「仰絶炎而締愧、謝涙河而軫憂」（『先秦漢魏晉南北朝詩』南朝宋・謝莊・山夜憂）という南北朝の散文に現れるが、漢詩での用例は見当たらない¹。次の唐代では、「涙河」のかわりに、「涙成河」「涙如河」の表現が用いられるようになる。「猶有涙成河、経天復東注」（盛唐・杜甫・得舍弟消息）、「慷慨為悲咤、涙如九河翻」（中唐・韓愈・雜詩）、「流年消壮志、空使涙成河」（中唐・殷堯藩・客中有感）、「如公之德世一二、豈得無涙如黄河」（晚唐・李商隱・安平公詩）はその例である²。これまで見てきたように、中国詩における「涙成河」「涙如河」は主に哀傷を表すときに使われ、ほかには嘆老、離別、大志を遂げられない悲哀を詠む場合に用いられ、恋愛詩の例は殆ど見られない。

日本の「涙」の漢詩は中国詩から極めて大きな影響を受けて形成されたものであることは、改めていうまでもない。奈良時代の『懷風藻』と勅撰三集を代表とする漢風賛美時代の「涙」の漢詩は、中国詩の表現を殆どそのまま踏襲したもので、中国詩に先例がない用例は稀である。九世紀末になると、国風意識の高まりに伴って、文人たちは中国詩の模倣と追隨にとどまらず、和歌表現を漢詩に取り入れて新たな展開を目指そうとしていた。さらに、平安中後期になると、日本漢詩文における和歌の表現・発想の流用の傾向はますます強くなった。平安朝漢詩文に詠まれた「涙河」については、渡辺秀夫氏『平安朝文学と漢文世界』に言及があり、大江朝綱の願文における「涙川」の表記と歌語「なみだがは」との影響関係について論じた³。ほかには、平安朝漢詩文に詠まれた「涙河」を正面に据え、その総体を見渡そうとした論考は未だ管見に入らない⁴。そこで本稿は、平安朝漢詩文における「涙河」の用いられ方を考察することによって、それが中国詩を脱して和歌の世界を指向した側面があることを

1 本論文は唐までの漢詩のみを対象とする。

2 中国詩では、激しく流れる涙の喩えは、「涙如水」「涙如泉」「涙如霰」といった例が見られる。

3 渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』第四篇「願文の世界」勉誠社、1991年1月、579～580頁。

4 拙論「『新撰万葉集』漢詩にみられる和歌的表現—「涙河」の漢詩を中心に」（和漢比較文学(49)、2012年）は『新撰万葉集』における三首の「涙河」の漢詩と和歌との関わりについて考察したが、ほかの平安朝漢詩文について言及しなかった。なお、本論文は、和漢比較文学会第一一二回例会での同題の口頭発表をもとにして、名古屋大学大学院国際言語文化研究科提出の博士論文一部に加筆修正を行ったものである。

明らかにしたい。

1. 平安初期における「涙」の漢詩と「涙川」の歌の生成

平安初期の空前の漢詩文隆盛を背景に、中国詩における涙を水の流れに重ねる表現が日本漢詩の世界に流入した。

漳河与妾涕、漳河と妾が涕と
 日夜流無乾。日夜流れて 乾くこと無し

(『文華秀麗集』哀傷・82・桑原腹赤・仰同_二尚書良右丞銅雀台_一一首)

当詩においては、曾て魏の武帝に仕えた侍女が武帝の死を悼んで涙を流すことが詠まれている。「漳河」は「恩共漳河水、東流無重回」(『全唐詩』初唐・沈佺期・銅雀台)のように、楽府題「銅雀台」の常套表現である。ここに見られる絶え間なく流れ出る涙を、とどまることのない川の流れに重ね合わせる手法は、「寒波与老淚、此地共潺湲」(『白氏文集』0566・重過寿泉憶与楊九別時因題店壁)に極めて近似している。九世紀後半の日本漢詩を見ると、

涙添暮水流哀逝、涙は暮水に添ひ流れて逝くを哀しぶ
 声□□□□□□。声は□□□□□□⁵

(『扶桑集』哀傷部・5・都良香・哭_二兎通朗_一)

逝水争流不再廻、逝く水争ひ流れて 再びは廻らず
 文華凋落豈重開。文華凋み落ちて 豈重ねて開かむや
 為君泣送千行涙、君の為に泣きて送らむ 千行の涙
 莫恨泉逢作雨来。恨むこと莫かれ 泉に逢ふに雨と作り来らむことを

(『田氏家集』191・島田忠臣・同_二高少史_一傷_二紀秀才_一)

孤子等量滄海以為涙、非尊靈拔濟之流。

孤子等滄海量りて以て涙と為すも、尊靈拔濟の流れに非ず

(『菅家文章』653・菅原道真・為_二左兵衛少志坂上有職_一、
 先考周忌、供_二養一切經_一法会願文、元慶六年)

のような作例が見られる。都良香は「涙添江水遠、心劇海雲蒸」(『全唐詩』林氏・送男左貶詩)のような中国詩に学んで、流水に寄せて亡兎を失った悲しみを表す。また、あなたのため流したたくさんの涙が、もしあの世で雨となったら恨まないでほしい、という島田忠臣の詩には、「逝水・涙・泉・雨」という言葉の響きがある。盛唐杜甫の「哭李尚書」には「漳濱与蒿里、逝水竟同年。…相知成白首、此別間黄泉。風雨嗟何及、江湖涕泫然」とあり、「水・泉・雨・江湖・涙(涕)」という言葉相互の照応が見られる。道真詩における「滄海一涙」の比喻表現は、『法苑珠林』第六十六卷に「滄海川流、皆同吾淚血」(述意部)「為之流涙、甚多無量、過四大海水」(傷悼部)が見える。この三首の漢詩は、中国の涙河詩と同じく哀悼の意味で

5 脱落した文句を□で示している。

使われたものである。「涙」に関する表現には緊密な言葉の関連を追求する傾向が見られるが、中国詩の枠から外れていない。

和歌の世界に目を転じてみると、『万葉集』には「涙」の歌が十九首あるが、「涙川」⁶の例は見られない⁷。神谷かをる氏は『万葉集』の「涙」の歌は恋歌より哀傷歌が多く、また「…白栲の衣手干さず嘆きつつわが泣く涙有間山雲ゐたなびき雨に降りきや」(巻三・460・七年乙亥、大伴坂上郎女、悲嘆尼理願死去作歌一首)における涙が雨のように降るという表現は「終日不成章、泣涙零如雨」(『文選』巻二十九・古歌十九首)のような漢詩文に学んだものであると指摘する⁸。九世紀後半には、一部の漢詩文の素養を持つ人によって、漢語「涙河」は「なみだがは」と訓読され、歌ことばとして自在に使いこなされていることもすでに指摘されている⁹。「涙川」の歌の生成と万葉歌と漢詩文との関連については、高橋亨氏が『源氏物語の詩学』において、「万葉集の歌では涙が雨として降って衣を濡らしたり、庭を流れたりし始め、漢詩文における詩句の発想を媒介としながら、観念的な心象風景としての「涙川」という歌ことばが、掛詞や縁語の技法によるかな文字表現としての『古今集』の世界で確立したという、おおよその経路を確かめることができる」¹⁰と述べる。次のAとBの歌を合わせて読めば分かるように、Bの『古今集』の「涙川」の歌の諸要素は、既にAの『万葉集』の歌に出揃っているのである。

A しきたへの枕ゆくくる涙にそ浮寝をしける恋の繁きに

(『万葉集』巻四・507・駿河采女)

B 涙川枕流るるうきねには夢もさだかに見えざありける

(『古今集』巻十一・恋一・527・読人知らず)

また、次のCの『万葉集』の歌とDの古今集撰者の歌とを比較して、歌人たちがいかに言葉の連想によって諸要素を融合して新たな表現の広がりを獲得していったのかを見てみよう。

C 言に出でて言はばゆゆしみ山川のたぎつ心を塞きあへてあり

(『万葉集』巻十一・2432・柿本人麻呂)

D 涙川いづる水上はやければせきぞかねつる袖のしがらみ

(『貫之集』562)

Cのように、川を「たぎつ心」に喩える歌が『万葉集』で既に存在している。Dの貫之歌は、

6 以下、漢詩文における「涙河」と区別するため、歌ことば「なみだがは」の表記を「涙川」で統一する。

7 涙の歌の数は神谷かをる「〈涙〉のイメジャリ」(国語語彙史の研究13、1993年7月、134頁)の統計による。

8 前掲注7神谷かをる論文、136～138頁。

9 富田淳子「歌語「涙川」について」二松学舎大学人文論叢46、1991年3月、37頁。なお、「涙川」の和歌をめぐっては、浜田弘美「涙河の出現—『古今集』恋歌の成立」(日本文学21-7、1972年7月)、小町谷照彦「古今和歌集と歌ことば表現」第二章「『古今集』の表現」(岩波書店、1994年10月、114～120頁)、ツバタナ・クリステワ『涙の詩学:平安朝文化の詩的言語』(名古屋大学出版会、2001年3月)などの論考がある。

10 高橋亨『源氏物語の詩学』第八章「物語を生成する〈涙川〉」名古屋大学出版会、2007年9月、200頁。

万葉以来の「山川のたぎつ心を塞く」という発想を継承しながら、袖と涙との緊密な関係を生かして、袖を涙川（押えきれない恋心）をせき止める柵に見立てることより、万葉以来の和歌表現を拓げていく。そして、「心一川」の隠喩を中国から伝わってきた「涙一河」の比喩と合流させて、「涙河」から「川」に縁のある言葉「水上・塞く・柵」を連鎖的に繰り出して、「涙川落つる水上」「袖のしがらみ」という表現を詠み上げている。つまり、貫之歌が端的に示すように、「涙川」の和歌は「川」を媒介として、「涙川」を「海・淵・瀬・泉・滝・濤標（身をつくし）・水脈・浦・沖・波・海松布（見る目）」などの言葉と関係させることで作り出されたのである。なお、中国詩の「涙河」は殆ど離別や哀悼表現に用いられるのに対して、和歌においては恋の文脈で用いられる「涙川」が圧倒的に多い。

2. 『新撰万葉集』と『続浦嶋子伝記』に詠まれた「涙河」

日本の漢詩では、九世紀前半には、「涙と川が共に流れる」と「涙－水」「涙－泉」「涙－海」の比喩表現が存在しているが、「涙－河」の比喩表現はまだ出現していない。「涙一河」の比喩表現が最初に日本漢詩に登場したのは、『古今集』の直前に成立した『新撰万葉集』（893）である¹¹。この作品は、寛平御時后宮歌合歌を主な資料として、その左歌を上巻、右歌を下巻とし、上巻を四季と恋という五つの部にわけて、それぞれの和歌に一首の七言絶句の漢詩を配している。『新撰万葉集』の漢詩が和歌をもとにして作られたことは、その表現も和歌に影響されることを意味する。

上恋 114 人不識下丹流留涙河堰駐店景哉見湯留砥
 （人知れずしたに流るる涙川せきとどめてむ影や見ゆると）
 毎宵流涙自然河、宵ごとに流るる涙 自然に河たり
 早旦臨如作鏡何。早旦に臨みて 鏡と作さむこと如何
 撫瑟沈吟無異態、瑟を撫で沈吟して 異なる態無し
 試追蕩客贈詞華。試みに蕩客を追ひて 詞華を贈らむ

『新撰万葉集』の和歌は本来万葉仮名で書かれて、「涙河」の表記が用いられる。先に述べたように、中国では「涙河」という語は南北朝の散文にしか見られず、漢詩で殆ど使われていないことが注意される。上恋 114 の和歌は、涙川を堰とどめて、それを水鏡として恋の相手の姿を見ようとする意である。「涙川」は「流るる（「泣かるる」の掛詞）」「せきとどむ」「影」といった縁語を伴って、恋歌に詠み込まれている。対する漢詩は女の立場に立って、〈夜ごとに泣いた涙はいつの間にか川になっている。明け方にその涙河に臨んで鏡にしたらどうだろう。いつも通りに瑟を弾いたり思いに沈んだりして、試みにあの人に詩文を贈ってみよう〉、と男に忘れ去られた悲しみを訴える。ここの「涙河」は、離別や哀悼表現に用いられる中国詩の「涙河」とは異なる、日本的な用法と見るべきであろう。また、〈涙河の水面を鏡とする〉という「涙河」の詠み方も中国詩と大いに異なっている。中国詩において、「涙成河」「水鏡」「臨鏡」のような表現は各々存在するが、それを組み合わせて一首に盛り込んで詠んだ例は殆ど

11 都良香の「涙添暮水流哀逝」は比喩表現ではないので、ここで「涙河」と区別して考えたい。

見られない¹²。このように考えると、「每宵流涙自然河、早旦臨如作鏡何」は中国詩の伝統表現によるものではなく、先行する和歌の「涙河せきとどめてむ影や見ゆると」を踏まえて作り出されたことがわかる。

もう一例をみる¹³。

上冬 95 涙河身投量之淵成砥凍不泮者景裳不宿
 (涙川身投ぐばかりの淵なれど氷とけねばかげもやどらず)
 怨婦泣来涙作淵、怨婦泣き来りて 涙淵と作る
 往年亘月臆揚煙。往にし年亘る月 臆煙を揚ぐ
 冬閨両袖空成河、冬閨の両袖 空しく河を成す
 引領望君幾数年。領を引きて君を望む 幾数年ぞ

当歌は「涙川・淵・氷・とく・かげ」等「川」の縁語によって、男の帰りを待ちわびる女の姿を浮かび上がらせる。対する漢詩は、〈長い年月女は泣き続けて、涙がこぼれて深く溜まって淵となった。胸が熱くなり煙が立ち上がるほど思い焦がれている。冬になると、女は閨で空しく泣いて袖が涙に濡れてしまう。首を長くして男の訪れを待ち望んで、いったい何年経ったのだろう〉という意味である。起句の「涙作淵」は「涙・川・淵」によって織りなされ、涙が川のように流れて深く淀んだ（「涙川身投ぐばかりの淵なれど」）という和歌の発想を踏まえて作られた表現であり、中国詩においてその類例が殆ど見いだされない。転句の「袖成河」という表現もその他の文献には未見であるが、『古今集』の「はやき瀬にみるめおひせば我が袖の涙の川に植ゑましものを」（巻十一・恋一・531・読人知らず）を想起させる。日本の詩歌では、「袖」と「涙」とが密接な関係にある。しかし、中国詩において袖と涙との関係は深いものではなく、涙が衣や巾などを濡らすことが多い¹⁴。つまり、『新撰万葉集』の漢詩作者は言葉の連想を働かせて、「涙成河」を「袖」とを結びつけることで、「袖成河」という斬新な表現を作り上げているのである。

『新撰万葉集』の「涙河」の漢詩の成立を契機に、平安中後期の「涙」の漢詩の詠みぶりも大きく変わった。『続浦嶋子伝記』（920～932）は浦嶋説話を改作したものであり、最後に浦嶋子の十首、亀姫の四首の和歌・漢詩群がある。その中には、

世緒海田我泣涙澄江丹紅深木波砥與頼南（亀媛）
 (世をうみて我が泣く涙住の江に紅深き波と寄らなむ)
 難忘旧裡查郎去、旧裡を忘るること難く 查郎は去りぬ
 別後絶逢恋慕催。別れし後 逢ふこと絶えて 恋慕催せり
 泣血成河添海上、泣血 河と成りて 海上に添はり

12 「水鏡」「臨鏡」の例としては、「透雪寒光散、消氷水鏡開」（中唐・白行簡・春從何処來）、「朝日照綺窓、佳人坐臨鏡」（初唐・王維・扶南曲）が挙げられる。

13 新撰万葉集には「涙河」が三例ある。前掲拙論を参照されたい。

14 例えば、白居易には「守歳尊無酒、思郷淚滿巾」（客中守歳在柳家庄）、「座中泣下誰最多、江州司馬青衫濕」（琵琶行）がある。

染波紅涙打江涯。波を染むる 紅涙は江の涯を打つ¹⁵

といった、「涙河」の漢詩が見られる。亀媛は浦嶋子を思って流す涙を、住の江（浦嶋子の故郷）に寄せる波に見立てて、離別後の悲しみを訴えている。後二句「泣血成河添海上、染波紅涙打江涯」は先行する和歌の「我が泣く涙住の江に紅深き波と寄らなむ」によく対応しており、紅色の涙河を詠んでいる。中国詩には「涙（如）河」「血涙・紅涙」があるが、「涙河」の色は殆ど詠まれない。そして、中国から伝わってきた「涙（如）河」を、「川」に関連する言葉「海・江・汀・打つ」と新たに關係づけて、〈血の涙が河となって海上に注ぎ、波を紅の色に染めて住の江の涯を打つ〉という幻想的な景象を描き出す手法が、『新撰万葉集』の作詩法に近似しているのではないかと思われる。なお、「流れ出る涙のために川水が岸にも溢れる」という表現は「ふぢごろも流す涙の川はきしにもまさるものにぞありける」（『蜻蛉日記』康保二年）などの歌にも見られる。

3. 平安中後期の漢詩文における「涙川」「涕川」「涙河」

大江朝綱は天曆期を代表する詩人であり、和歌にも造詣が深く、『後撰集』に三首、『和漢兼作集』に一首見えている。十世紀中期、「涙川」は詩語として『本朝文粹』所収の大江朝綱の願文に登場した。

①雖知苦海之常理、還迷涙川之難留。

苦海の常理を知ると雖も、還た涙川の留め難たきに迷ふ

（卷十四・為重明親王家室四十九日願文・天慶八年三月五日）

②欲述心緒、舌根結而易乱。更防涙川、胸陂溢而難留。

心緒を述べんと欲すれば、舌根結ばれて而乱れ易く。更に涙川を防げば、胸陂溢れて而して留め難し

（卷十四・為左大臣息女女御四十九日願文・天曆元年十一月二〇日）

『新撰万葉集』における「涙河」と違って、大江朝綱の願文では「涙川」という語が用いられている。この「涙川」の表記について、渡辺秀夫氏は「涙河」は下って（筆者注：北宋の蘇軾「和王旂二首」詩にみえるが、「涙川」はみえない。恐らくこれは、漢語ではなく歌語「なみだがは」の取用とみるべきであろう。…倭風の表現と習合しつつ成立するこの期の願文に流入した国文脈の語彙の事例の一つとして留意しておきたい¹⁶と指摘する。しかし、前述したように、「涙河」は南北朝の散文にすでに用いられていた。「涙川」は唐代まで用例が見出せず、南宋楊万里の「清風未作記、挂劍涙川流」（『四庫全書』集部・誠齋集・謝從善挽詞）

15 当詩の訓み下し文は渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』第三篇第二章「『統浦嶋子伝記』の論」（勉誠社、1991年1月）による。なお、ほかの漢詩文の訓読は、岩波書店刊日本古典文学大系『文華秀麗集』『菅家文草・菅家後集』、和泉書院刊『田氏家集注』『新撰万葉集注釈』を参照した。

16 渡辺秀夫『平安朝文学と漢文世界』第四篇「願文の世界」勉誠社、1991年1月、580～581頁。なお、渡辺氏は『詩歌の森』IV「たぎる思い」（大修館書店、1995年、234頁）において「歌語「なみだがは」は和製漢語「涙川・涕川」として流用された」と同様な観点を述べた。

に初めて使われたようである。一方、日本漢詩文における「涙川」の初例は、空海(774～835)の入唐前の作『聾瞽指帰』にあったのである。「嗚呼哀哉、詠潘安詩、弥増目泉。譎伯姫引、還深涙川」とある¹⁷。だが、『聾瞽指帰』は『三教指帰』(797)の初稿本であり、『聾瞽指帰』の「目泉」「涙川」は『日本古典文学大系』所収『三教指帰』では、「哀哭」「裂酷」となっている。『三教指帰』でなぜ「哀哭」「裂酷」に書き替えられたのかは不明であるが、『聾瞽指帰』の「涙川」の例は歌ことば「なみだがは」と南宋楊万里の「涙川」より先に成立したことが明らかである。『聾瞽指帰』が直接的に大江朝綱の願文に影響したのかどうかはともかくとして、ただ確実にいえることは、漢語「涙川」が歌ことば「なみだがは」ではなく、漢語「涙河」に基づいて作られたことである。恐らく「涙川」は、「河・川」を共に「かは」と訓じることにより生じた和製漢語であろう。

②の願文における「更防涙川、胸陂溢而難留」は抑えようとしても抑えられずに涙が溢れる様を詠んでいる。「陂」については、『倭名類聚抄』に「礼記注云蓄水…亦所謂之堤」とある。中国詩における「陂溢」は、「郡多陂池、歳歳決壊、年費常三千余万」(『後漢書』卷二十九)のように、本来自然災害に用いられる辞句である。ここでの「胸陂」は平安人の造語であり、あふれる思いをせきとどめる心の堤防を表す。そして、「陂溢」「防」は「水」に関連する「涙川」と組み合わせることで、涙が堰を切ったように流れ出て止まらない様を表現すると同時に、水流の速さで思いの激しさを表している。この発想は次の和歌にも見られる。

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへずたぎつ瀬なれば

(『古今集』卷十二・恋二・557・小野小町・返し)

たぎつ瀬のはやき心を何しかも人めつゝみの塞きとむらむ

(『古今集』卷十三・恋三・660・読人知らず)

涙川いづる水上はやければせきぞかねつる袖のしがらみ

(『拾遺集』卷十四・恋四・876・貫之)

第一首目の小町歌は「せき」を溢れる涙川で、抑えきれない思いを形象的に表現している。第二首目の読人知らず歌は、「たぎつ心」を堰き止める人目から隠す「堤(「慎み」の掛詞)」が描かれる。②の願文における「胸陂」は情を抑えるべきことを意味する「堤」に基づいて作られた表現ではないかと考えられる。「更に涙川を防げば、胸陂溢れて而して留め難し」は、「たぎつ心—激流」の比喩表現を念頭に置きながら、「防・陂・溢・留」の築堤、越水、破堤、氾濫の様々な要素をちりばめることで、自制しようとしても抑えられない心の動きを効果的に表現している。第三首目の貫之歌における「涙川…堰きぞかねつる」は①②の願文の「涙川…難留」に相当し、「しがらみ」は②の「陂」と同様に涙河(押えきれない恋心)をせき止める装置として働いている。

さらに、天曆六年(952)、大江朝綱は「涙川」に基いて「涕川」という語を創り出した。

17 本文は太田次男『空海及び白楽天の著作に係わる注釈書類の調査研究(中)』第九編「『聾瞽指帰』と『三教指帰』との本文の吟味—附・『聾瞽指帰』の翻字及び校注—」(勉誠出版、2007年6月)による。なお、『聾瞽指帰』の例は北山門正先生のご教示によるものである。記して感謝する。

③方今仁山長崩、群居無主之荒砌。慈海已竭、共溺恋恩之涕川。

まさ じんざん くず むしゆ こうせい ぐんきよ じかい つ れんおん
 方に今仁山長く崩れて、無主の荒砌に群居し、慈海已に竭きて、共に恋恩の涕川に
 おぼお
 溺る

(卷十四・朱雀院四十九日御願文・天曆六年十月二日)

朱雀院の御崩により、人々が頼りなく涙に暮れて、悲しんでいる様子が描かれている。「仁山長崩・慈海已竭」は朱雀院の死の暗喩であり、『世説新語』の「山崩溟海竭、魚鳥将何依」の語句を踏まえながら、駢儷文の特徴を生かして対偶をなしている。ここで注意されるのは、「恋恩の涕川に溺る」という表現である。「流転生死沈溺愛河」(『大乘理趣六波羅蜜多經』唐・般若訳)、「長溺苦海無出期」(『大乘本生心地觀經』唐・般若訳)は衆生の七情六欲に苦しむ姿を、愛河・苦海の中で溺れている様に喩えている。大江朝綱は「川」を介して「涙川」と「溺愛河・溺苦海」を融合させて、人々が朱雀院のことを思い慕って悲しみにくれる様子を表現している。①の願文にも「苦海・涙川」の対が見える。とはいえ、仏典では「涙川」に溺れる例が見出せない。「恋恩の涕川に溺る」の類似表現は、次の和歌に見られる。

あかずして君を恋ひつる涙にぞ浮きみ沈みみやせわたりける

(『寛平御時后宮歌合』167・作者未詳)

さらばよと別れしほどに言はませば我も涙におぼほれなまし

(『伊勢集』264)

これらの歌は、願文と和歌との交渉のあったことを物語る好例となるであろう。「恋恩之涕川」は流す涙がたまってできた淵の底に身が沈む「恋の涙川」に相当する。「溺」という語は悲しみから抜けきれず涙に耽る様を意味するとともに、思慕の深さをも表している。「慈海已竭、共溺恋恩之涕川」の一句の中では、仏教語「慈海」「溺愛河」、漢詩表現「海竭」、和歌表現「涕川」「涙に沈む」が「川」を媒介にして結ばれており、高度な技巧が凝らされている。なお、『本朝文粹』においては、「涙」が「溺・沈」とともに使われる用例が他にも多く見られる。「悲泣双流、則臣之両瞳永溺」(卷十二・詰眼文・善居逸)、「欲陳心憂、声被涙溺」(卷十四・清慎公奉為村上天皇修諷誦文・菅原文時)、「非戴聖日之照臨、何乾沈身之愁涙」(卷六・請特蒙天恩因准先例兼任備中介闕状・大江匡衡)、「此間吾等、縦沈至哀之涙泉、他界衆生、定飲大悲之乳海」(卷十四・花山院四十九日御願文・大江以言)が挙げられる。

死者の冥福を祈る追善供養のために作成された願文において、「涙」は悲哀や哀悼の意を表すために大切な役割を担う。願文に詠まれる「涙河」は、再び哀傷の原点に戻るとしても、中国詩の「涙一河」の比喩表現と大きく懸隔のあるものである。そこでは、「川」を媒介として仏典的要素、漢詩的要素、和歌的要素を一句の中に組み込んで「涙河に溺れる」「涙河の堰が切れて水が流れ出て止まらない」という心象風景が構築されているのである。

ここで、『新撰万葉集』下巻の漢詩における「涙河」をすこし検討したい。『新撰万葉集』の下巻には延喜十三年(913)と明記する序文があるが、下巻の漢詩は『和漢朗詠集』成立

以降の作とされている¹⁸。その漢詩も和歌を強く意識して作られたものである。

下恋 238 不飽芝手別芝初夜之涙河與砥美裳無裳涌立心歎
 (飽かずして別れし宵の涙川淀みも無くもたぎつ心か)
 不飽郎¹⁹ 君自別離、飽かずして 郎君 自ら別離す
 初夜涙河堰無留。初夜の涙河 堰^せけども留まるなし
 郎與我兩袖染紅、郎と我と 兩袖 紅に染む
 怨氣散雲散雨流。怨氣 散雲^{さんうん}として散りて 雨と流る

当詩は恋人と別れて夜一人で涙を流している女の姿を描いている。起句の「不飽」は原文の万葉仮名「不飽(飽かずして)」、転句の「初夜涙河」は「初夜之涙河(宵の涙川)」をそのまま使っている。「堰無留」は当歌の「淀みも無くもたぎつ」の言い換えとみなしてもよいが、或いは和歌表現「堰留めぬ」の訳語として理解できよう²⁰。転句「初夜涙河堰無留」は前掲する願文の「胸陂溢而難留」と同様に、「川」を介して「堰」と「涙河」とを融合させて、激しい恋心を表している。漢詩の韻律も合わず、和歌表現の流用も著しく見えることを勘案すれば、当詩はやはり平安後期の作と推定することができよう。

4. おわりに

以上の考察を通して、平安朝漢詩文における「涙河」が和歌から影響を受けて、中国詩とは異なるものに変容していくことを明らかにした。平安朝漢詩文においては、「涙-河」の比喩表現が最初に用いられたのは『新撰万葉集』である。それまでの「涙」に関する日本漢詩は殆どが中国詩を踏まえて詠まれたものであるが、『新撰万葉集』の漢詩は中国詩の「涙如河」の比喩表現を踏襲するのみではあき足らず、「川」に関連する言葉を駆使して「涙川を鏡とする」「流す涙がたまって深い淵となる」「袖が河となる」という新たな表現を作り上げている。また、「涙河」が恋の文脈で用いられる点において、伝統的な使い方とは大きな差異がある。『新撰万葉集』の作詩法は後の『続浦嶋子伝記』に受け継がれていく。本来お互いに関係することなく独立して使われていた「涙河」と「海・江・汀・打」の語群とが結びつけられ、「涙河の波が岸を打つ」という表現となっている。国風化の気運の高まりに伴って、平安朝漢詩文の和様化はより顕著に見られるようになり、「涙川」「涕川」という和語が創り出された。「涙河」の願文は、死者を悼む点において伝統的中国詩に共通しているが、「涙-河」の比喩表現を「川」に関連する和歌表現や仏教語などと結びつけることで、「涙川に溺る」「涙河の堰が切れた」という漢詩表現が練り上げられている。「涙河」の事例が端的に示すように、平安朝の漢詩文は様々なエッセンスを吸収し、「和」と「漢」が複雑に入り組んだものとなっているのである。

18 高野平『新撰万葉集に関する基礎的研究』「菅家後集以降の日本詩と本集漢詩」(風間書房、1970年5月)に詳しい。

19 『新編国歌大観』には「良」とあるが、元禄九年版本(『新撰万葉集』諸本と研究)和泉書院、2003年9月)によって「郎」に改める。

20 田中大士氏は「黄河考-新撰万葉集漢詩の手法-」(万葉118、1984年6月、24頁)で、下巻の漢詩は和歌の言葉(真名)をそのまま使う表現があると指摘している。

引用文献

- 台湾商務印書館刊『景印文淵閣四庫全書』
明治書院刊新釈漢文大系『玉台新詠』『文選』
中華書局刊『先秦漢魏晉南北朝詩』『世說新語』『全唐詩』『芸文類聚』
岩波書店刊日本古典文学大系『文華秀麗集』『菅家文草・菅家後集』
和泉書院刊『田氏家集注』『新撰万葉集注釈』
続群書類従完成会刊群書類従文筆部『続浦嶋子伝記』
新訂増補国史大系『本朝文粹』『本朝続文粹』
新日本古典文学大系『万葉集』『古今和歌集』
角川書店刊『新編国歌大観』、日本古典文学全集『蜻蛉日記』

Ruika(river of tears) in kanshi of the Heian period

Qing LIANG (Amoy University/Hakuho Foundation Japanese Research Fellow)

【Keywords】 Heian period, Kanshi, Waka, Ruika

Instead of copying others mechanically, Japanese poets started searching for their own individual direction. This article discusses expressions relating to ruika(river of tears) in the Japanese kanshi of the Heian period. We can find that it is different from the portrayal of ruika in Chinese kanshi, but bears a striking resemblance to that of Japanese ruika described in waka.